

市原市武士遺跡の調査成果－補遺－

加 納 実

はじめに

市原市武士遺跡は、中期後半(加曾利EⅡ式期新段階もしくはⅢ式期古段階)～後期中葉(加曾利BⅠ式期新段階)にかけて、繰り返し土地利用がなされた集落で、400件を越す住居跡や900基にもおよぶ土坑をはじめ、後期初頭の関西系土器群(加納2000a)や後期中葉の掘立柱建物跡の発見をはじめとする多くの成果を得ることができた(第1図(財)千葉県文化財センター1998)。

武士遺跡の集落分析については、報告書中で住居跡配置の変遷からいくつかの見通しを提示し、その後、そこでの成果を基に、中期後半から後期中葉の集落の様相を「集落的居住の崩壊と再編成」(加納2000b)と捉え、「中期最終末期以降の集落址の変遷過程が示された訳で、今後の後期集落研究にあたってのひとつのモデル」(石井2001)として示すことができた。

その後、武士遺跡と同じ東京湾東岸域においては、所謂“盛土遺構”を擁する君津市三直貝塚((財)千葉県教育振興財団2006)、“中央窪地”の土地利用がなされる袖ヶ浦市上宮田台遺跡((財)千葉県教育振興財団2010)等の発掘調査成果の公表、さらには市原市祇園原貝塚((財)市原市文化財センター1999)や西広貝塚((財)市原市文化財センター2005、市原市埋蔵文化財調査センター2007)などの発掘調査報告書が刊行されるなど、これら新資料の咀嚼による武士遺跡モデルの検証・修正、もしくは新たなモデルの提示等を行って環境が整いつつある。

このような環境に鑑み、本稿では、整理作業のなかでは時間的な制約から基礎データの数値のみの提示に留まった発掘調査成果について、あらためて基礎的な操作・資料提示を行うこととした。内容としてはおおきくわけて、

- 1 遺構外土器分布
- 2 時期別石器組成
- 3 関西系土器群について

の3点である。

しかし紙数の都合から、本稿で提示する基礎的な

データの咀嚼・解釈については、機会を改めたい。

なお武士遺跡に関し、報告書で示したデータ等の再評価・再構成を実施したのものとして、本稿とは別に、関西系土器群の編年学的位置に係る論考(加納2000a)、土器の胎土分析に係る論考(加納2008)、土坑覆土のリン・カルシウム分析に係る論考(加納2012)があるので、併読願いたい。

1 遺構外土器分布

報告書中では、遺構(住居跡・土坑)内および遺構外から出土した土器群について、

- I類 早期条痕文系土器群
- II類 加曾利EⅢ・Ⅳ式期土器群
- III類 称名寺式期土器群
- IV類 堀之内Ⅰ式期土器群
- V類 堀之内Ⅱ式期以降土器群
- その他・不明

と分類し、各類の出土量を、遺構内においては点数で、遺構外においては重量(単位g)でその数値を示しておいた(報告書第3分冊第5～7表)。なおV類については、その量的な主体は圧倒的に堀之内Ⅱ式～加曾利B式期であるが、遺構が設営されない曾谷式期前後の土器も極少量ながら含まれている。なお、晩期末葉の土器群((財)千葉県文化財センター1996)についてはV類には含めていない。

さて、ここでは遺構外出土の各類の土器群の重量(集落の設営が認められないI類は除く)の分布状況を第2～5図に示す。

発掘区は40m×40mの方眼の大グリッドを東西8区画、南北11区画設定し、西から東に向かってA-B-C・・・、北から南に向かって0・1・2・・・とし、E0・F1とした。大グリッド内を4m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02・・・、北から南へ00・10・20・・・とした。各々の小グリッドはE1-99・F3-90ようになる。重量分布図(第1～4図)中の最小の方形単位はこの4m方眼の小グリッドである。

また、遺構外出土土器の分布と居住域の関係を示すために、各時期(各類)に設営されたと判断した住居跡の位置するグリッド(複数グリッドにまたがる住居跡であっても1グリッドで表記)について、グリッド枠を太線で示した。なお、住居跡の配置については報告書第3分冊第1272~1275図をもとにした。

なお、本稿において、各小グリッド出土の各類土器の重量分布を作成したところ、G2・H2・H3の大

グリッドの重量の数値が報告書に未掲載であることが判明した。この数値について、手元に残るデータを検索したもの、見出すことができなかった。資料提供を生業とするものとしては痛恨の失態であり、ここに深くお詫びし、引き続きデータの検索を続けていきたい。

ただし、整理作業の手順としては、①4m小グリッドごとの土器片を大テーブルに広げ、②各類に分類し、



第1図 武士遺跡における縄文時代中・後期の遺構配置図

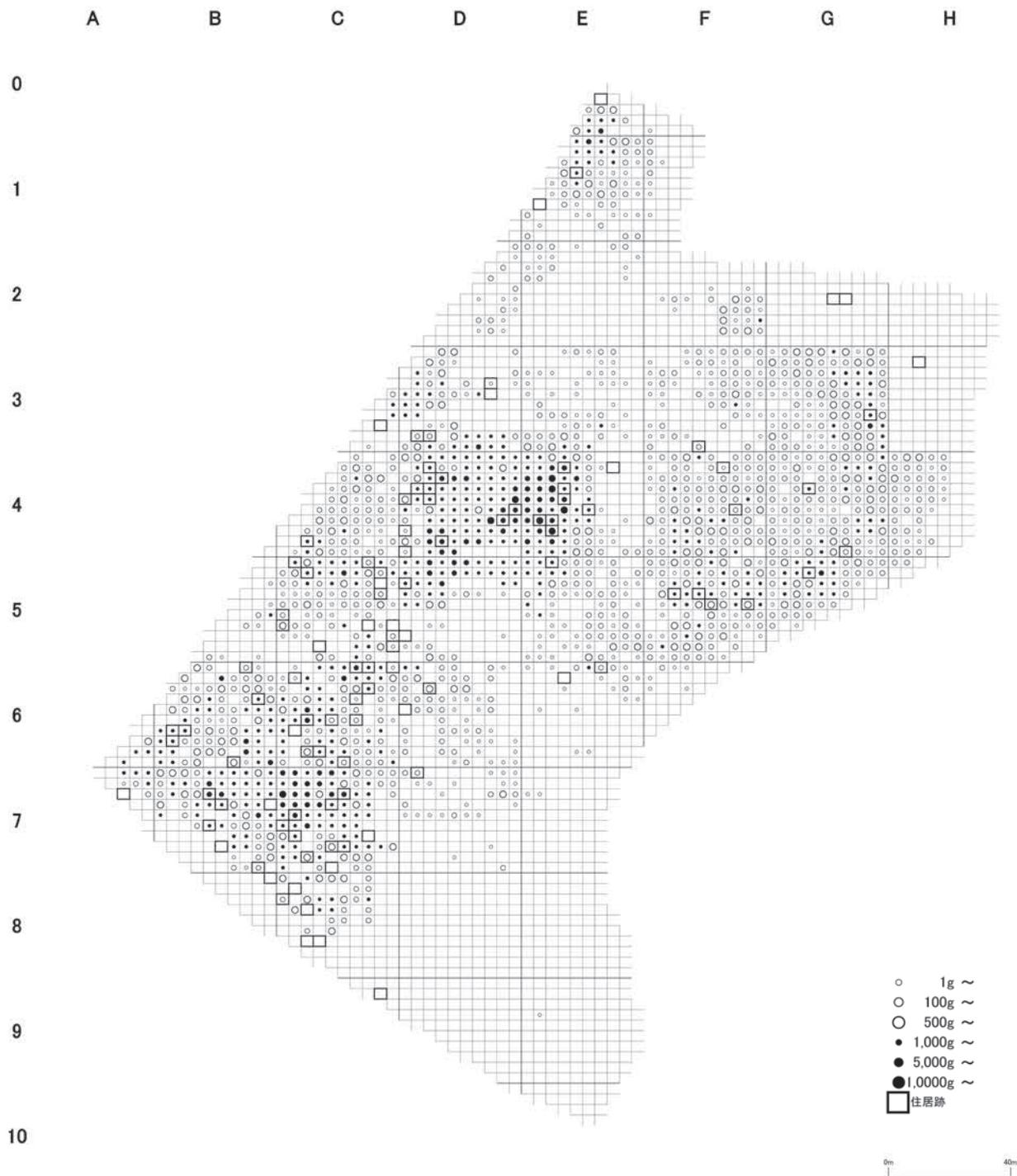
③集計を行った後に、④接合及び報告書に掲載すべき土器片の抽出を行っている。よって、当該大グリッド出土の実測完形個体・土器片については報告書に掲載されていることから、集計作業自体の欠落は無かったことを明記しておきたい。

2 時期別石器組成

遺構一覧表(住居：報告書第1分冊第2表、土坑：

報告書第1分冊第3表)の設営時期をもとに、加曾利EⅢ・Ⅳ式期、称名寺式期、堀之内1式期、堀之内2式期以降に限定できる住居跡・土坑出土の石器を対象にした。

遺構外出土石器については、単独の時期(類)のみの土器が出土している4m方眼の小グリッドから出土した石器を、その時期に伴うものと判断し、分析対象とした。



第2図 II類(加曾利EⅢ・Ⅳ式期土器群)重量分布図

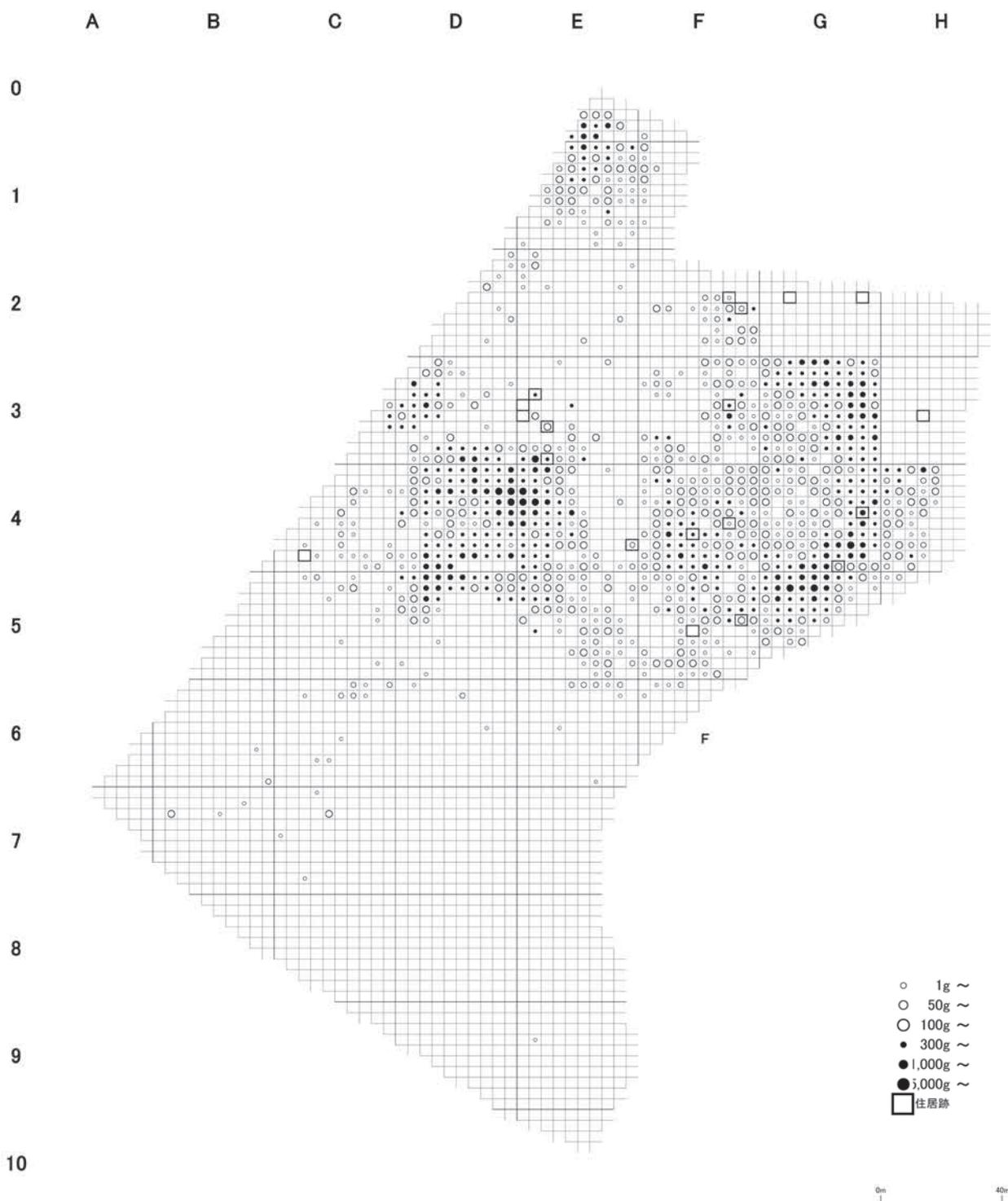
石器の器種について、石鏃・打製石斧については、報告書第3分冊集計表(第8～10表)の当該項目(「石鏃」「打斧」)をカウントした。

磨石については、やはり第3分冊集計表(第8～10表)の「円礫製加工具」のすべてを対象とした。以上の住居跡・土坑・グリッド名と石器の集計を表1に示し、併せてこれらの比率をもとに、三角ダイヤグラム

(第6図)に示した。

なお、遺構毎・小グリッド毎の出土石器点数一覧については、紙数の都合から省略させていただいた。

また、本県域においては、石器石材の産出が豊富ではないことから、石器石材の徹底的な再利用が論じられている。即ち、中期終末に用いられ廃棄された石器が、再び後期初頭以降、生活領域内に散在する素材と



第3図 Ⅲ類(称名寺式期土器群)重量分布図

して再利用されるような実態が想定され、石器石材の使用痕等による分類・分析には、時期が下るに従い「ゆらぎ」が生じる可能性があるとの認識するが、本稿での「石鏃」「打製石斧」「円礫製加工具」という分類においては、この3者間での転用（例えば打製石斧を石鏃に転用）等は一般的ではないとの推察により、分析における「ゆらぎ」の介在は捨象し得よう。

3 関西系土器群について

711号土坑・712号土坑からは関西地方に系譜を求められることのできる中津式土器が出土している(第7図)。近接する両土坑間の距離は僅か60cm程度である。

出土した破片は接合し、報告書では接合後の復元実測図及び拓影図を示した。これらの破片は、「712号土坑出土の個体単位部の把手」と、「711号土坑出土の個



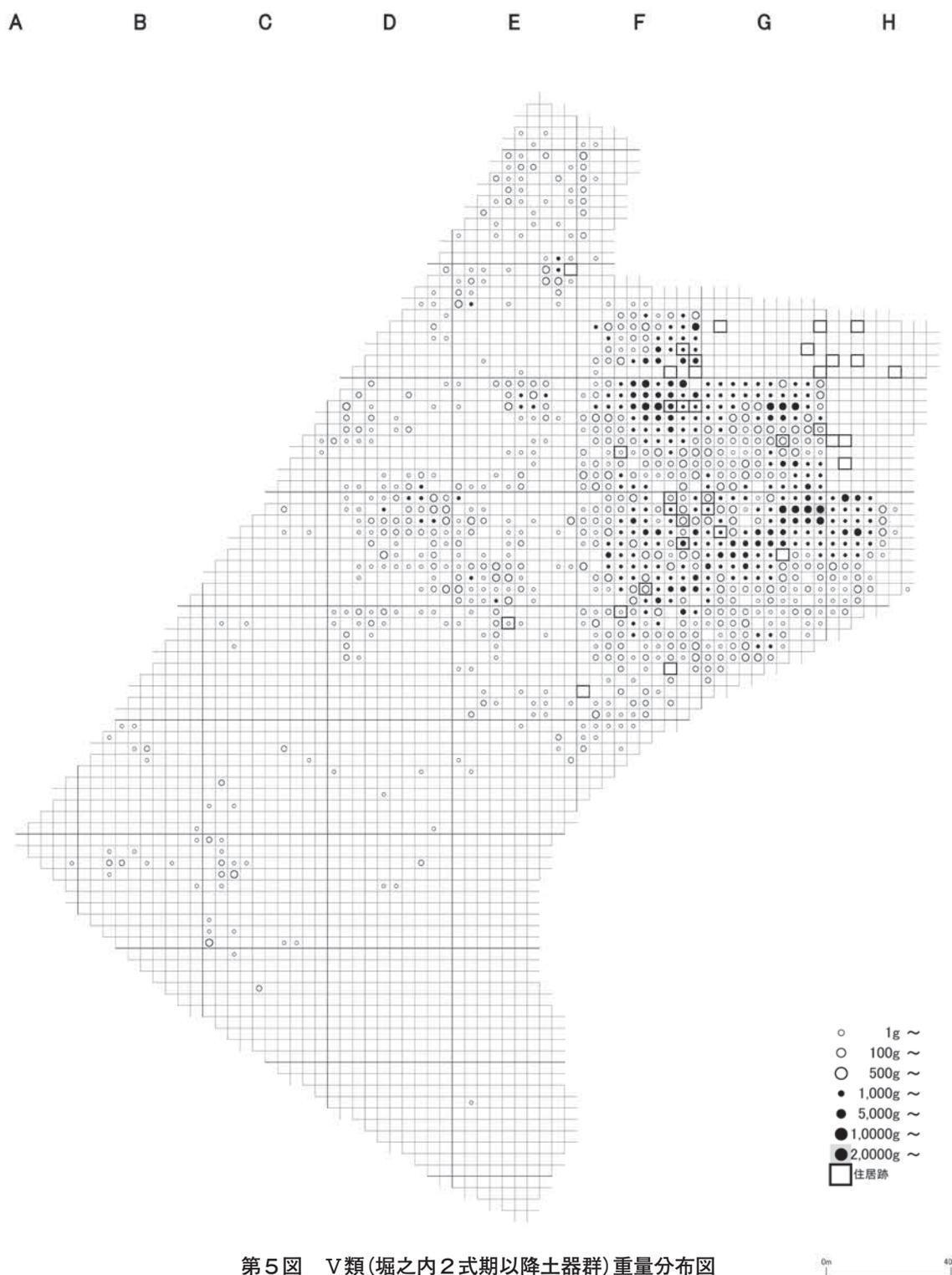
第4図 IV類(堀之内1式期土器群)重量分布図

体単位部ではない破片(拓影図下半の網かけ破片)」と、「遺構外出土の破片」に分かれる。なお、遺構外であるG2-83グリッドは、711号土坑南半と712号土坑全体が属する小グリッドであることから、この破片の由来は両土坑のいずれか(おそらく711号土坑)と推察できる。

この土器の出土状況(誘目性を帯びる破片とそうでない破片の区分と、その廃棄もしくは埋納)は興味深

い事例であるが、報告書ではこの事実について、活字のみで示すに留め、解り易く図示することはできなかった。その後、加納(2004)において図示する機会を得たことから、今回、あらためてここに図示しておきたい。

なお両土坑の覆土は、発掘調査段階で土壌を試料採取し、リン・カルシウム分析を行っているので、分析結果を示しておきたい。



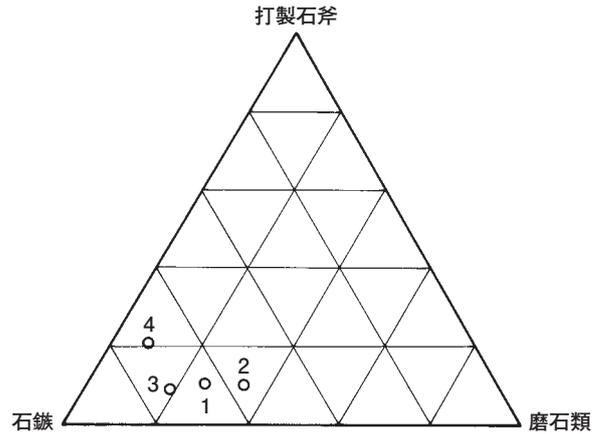
第5図 V類(堀之内2式期以降土器群)重量分布図

分析前に筆者が描いたモデルは、異系統の個体の誘目性を帯びた把手部は副葬品として選択・埋葬(712号土坑)し、誘目性にかける破片は一括して周辺の穴に廃棄(711号土坑)したとのモデルを想定した。

しかし、誘目性を帯びない破片が出土した711号土坑について、筆者は、人為的埋土層であり墓坑である可能性が極めて高いと認識したが、リン・カルシウム分析からは人体等の埋葬の可能性に指摘するのは難しいとの見解が示された。

第1表 石器集計表

番号	時期	打製石斧		石鏃		磨石	
		点数	比率%	点数	比率%	点数	比率%
1	加曾利EⅢ・IV式期(Ⅱ類)	26	10	69	26	172	64
2	称名寺式期(Ⅲ類)	5	11	15	34	24	55
3	堀之内1式期(Ⅳ類)	32	9	68	19	252	27
4	堀之内2~加曾利B式期(Ⅴ類)	14	21	5	7	49	72

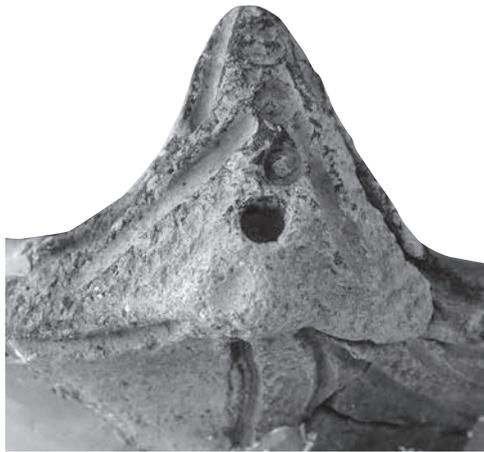


第6図 出土石器三角ダイヤグラム
(番号は第1表に対応)

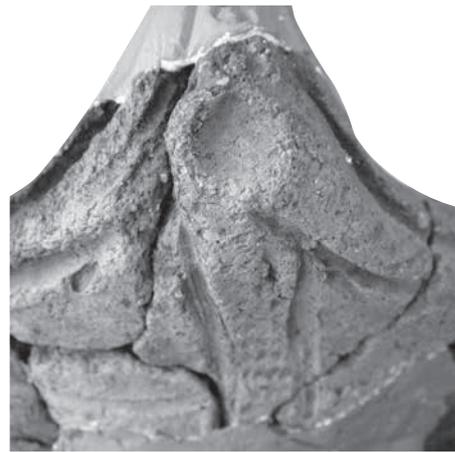


(網かけ部分は711号土坑出土)

第7図 711号・712号土坑出土関西系土器群



1a



1b



1c



1d

写真1 711号・712号土坑出土関西系土器群(千葉県教育委員会蔵 撮影筆者)

一方、誘目性を帯びた破片が出土した712号土坑について、筆者は、覆土の一部は人為的埋土層である可能性が高いと認識し、リン・カルシウム分析からは人体等の埋葬の可能性があるとの見解が示された。

おわりに

本稿では、武士遺跡に係る遺構外土器分布・時期別石器組成・関西系土器群の基礎資料の提示を行った。1998年の埋蔵文化財発掘調査報告書の刊行以来、20年以上の時を費やしてしまった不始末をお詫びするとともに、これらのデータを基にした武士遺跡全般にわたる再検討を約束して、ひとまず筆をおきたい。

なお、本稿における基礎データの再構成開始から既に10年近くの時が流れている。データの再構成に際しては小倉美和子氏の尽力があったことを明記しておきたい。

引用・参考文献

石井 寛 2001「〈縄文時代における集落変遷の画期と研究の現状をめぐる〉③関東地方」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会

市原市埋蔵文化財調査センター 2007『西広貝塚Ⅲ』
 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』六興出版
 加納 実 2000 a「武士遺跡出土の関西系土器群の再評価」『貝塚博物館紀要』27号 千葉市立加曾利貝塚博物館
 加納 実 2000 b「集落的居住の崩壊と再編成－縄文中・後期集落への接近方法－」『先史考古学論集』第9集
 加納 実 2004「(1)運ばれてきた土器『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』千葉県
 加納 実 2008「搬入土器・異系統土器」『土器を読み取る－縄文土器の情報－』縄文時代の考古学7 同成社
 加納 実 2012「土坑の機能類推に関わる一視点」『縄文時代』第23号 縄文時代文化研究会
 (財)市原市文化財センター 1999『祇園原貝塚』
 (財)市原市文化財センター 2005『西広貝塚Ⅱ』
 (財)千葉県教育振興財団 2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7－君津市三直貝塚－』
 (財)千葉県教育振興財団 2010『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10－袖ヶ浦市上宮田台遺跡2(旧石器・縄文時代)－』
 (財)千葉県文化財センター 1996『市原市武士遺跡1』
 (財)千葉県文化財センター 1998『市原市武士遺跡2』
 西野雅人 1999「縄文中期の大型貝塚と生産活動－有吉北貝塚の分析結果－」『千葉県文化財センター研究紀要19』(財)千葉県文化財センター